

空耳
總理執務室の

黒河小太郎政治小説集



黒河小太郎

総理執務室の
空耳

黒河小太郎政治



黒河小太郎

中央公論社

総理執務室の空耳

——黒河小太郎政治小説集

一九九四年八月二〇日 初版発行

一九九四年九月二〇日 再版発行

著者 黒河小太郎

発行者 嶋中行雄

印刷所 三晃印刷

製本所 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替 〇〇一二〇一四一三四

©1994 Printed in Japan

ISBN4-12-002344-3

目次

小説 野党連立政権誕生す	5
小説 続・野党連立政権誕生す	49
小説 一九九四年大動乱——それはデノミから始まった	73
小説 決断！——コメ・マフィアたちのXデー	131
三酔人鼎談 黒河小太郎って、だれだ？	207
足川虎二／唯野 誠／佐藤デンスケ	
著者あとがき	249

装 幀
カバ ー 画
野 村 俊 夫
菊 地 信 義

総理執務室の空耳——黒河小太郎政治小説集

そらーみみ【空耳】①物音や声がないのに、それを聞いたように思
いちがうこと。幻聴。能因本枕草
子祭りの頃は「忍びたるほととぎす
の遠うーかとおぼゆるまでたどた
どしきを」②聞いて聞かないふり
をすること。「ーを使う」

——『広辞苑』より

小説 野党連立政権誕生す

『中央公論』一九九三年六月号収載

ジェフリー・アーチャーは政治小説の傑作『めざせダウニング街10番地』(1)の冒頭、次のような「断わり」をつけた。

「この小説はフィクションである。登場人物の名前、性格、場所、事件などはすべて作者の想像力の産物か、フィクションとして使われたものである。現在の事件、場所、現在または過去の人物に似ているとしても、それはまったくの偶然である」

この短い小説にもまったく同じ「断わり」をつける。これから始まる物語はすべてフィクションであり、登場する人物や団体、それに状況が現在と似た部分があったとしても、すべて偶然である。

一九九三年六月十八日 金曜日

「そうですか。それしか道がありませんかな。私は霸道はできるだけ避け、王道をと思っていました。もはややるしかない、ということですか」

(1) 『めざせダウニング街10番地』 原題は "First Among Equals"。同輩中、首位に立つもの。すなわち「首相」を意味する。自らも政治家であった英国の作家ジェフリー・アーチャーが書いた。六〇年代から九〇年代初めまでの英国政治が現実即して書かれ、途中から近未来政治小説になっている。三人の若き政治家の首相レースを描いたサクセス・ストーリー。アーチャー自身、この小説を体現しようと考えていたようにも思われるが、スキャンダルや評判の悪さで夢は途絶える。アーチャーはマーガレット・サッチャー首相の片腕だったが、最後は離れた。

永田町の首相官邸二階にある首相執務室。自民党幹事長の梶山静六は宮沢喜一⁽²⁾ののんびりしたもののいい方にいらいらしていた。

「総理、政治改革特別委員会で何のために強行採決したか考えてみてください。委員長は田辺国男君はネクタイをちぎられ、理事の浜田卓二郎君⁽³⁾は眼鏡を壊されました。ハマコー⁽³⁾にいたっては委員長を守ろうとしたとき、野党議員に腕を引っ張られ、左手を脱臼して、医務室へ運ばれたんですぞ」

「そうですか。ハマコーがけがするなんて、彼もやはりトシですか」

「普通なら委員会で強行採決したあとは、ちよつとほとぼりを冷まして、衆院議長の議長幹旋という手を使えるんですが、今回はだめです。どっちにしる社会党は、混乱させて小選挙区制度を流してしまふのが一番いいと考えているんですから」

「でも議長が本会議のベルを押しますかな」

「そこは手を打ってあります。妙な気を起こして歴史に名を残そうなんて思わぬよう、中曽根(康弘)さんから桜内(義雄)議長に釘をさしてもらいました」

(2) 宮沢喜一 一九九一年十一月から九三年八月まで第七八代内閣総理大臣をつとめた。自民党第一五代総裁でもあり「最後の将軍徳川慶喜」と揶揄されたが、本当にその通りになり、自民党三八年間の一党支配は幕を閉じた。歴代自民党総裁の中ではもっともインテリだったが、政治力は著しく欠けていた。無駄なことは一切しない徹底した合理主義者である。一時は首相の椅子は絶望と思われていたが、もっとも相性の悪かった金丸信(元副総裁。佐川急便からの五億円献金問題で副総裁を辞任。その後、巨額脱税容疑で逮捕され、金丸時代は終わった)の力を借り、首相になった。外国生活をしたことのない日本人の英語としては追隨を許さないほどの高レベル。宮沢英語の難しい言い回しに、育ちの悪いビル・

「それでいつやりますか」

「夜の六時にはベルを押します。自民党単独でも本会議を開会しますが、野党も欠席戦術はとれないでしょう。閣僚の不信任決議案や議長不信任決議案などを連発し、場合によっては牛歩でくるかもしれません。でも社会党はもう牛歩には懲りていませんから、やっても形だけでしょう。ここで衆院を通過させておけば、政治改革をつぶしたのは野党だということをはっきりさせられます。いずれにしろ、一晩徹夜すれば終わります。二十日の会期切れまでには片はつきます」

政治改革特別委員会を舞台にした与野党の折衝は、結局、暗礁に乗り上げたまま、妥協の道を見いだすことができなかった。自民党は単純小選挙区制から、民間政治臨調の連用型まで譲歩する構えを見せたが、社会党は併用型比例代表制を譲るわけにはいかない、と突っぱねた。世論は連用型での与野党妥協を促し、自社双方とも妥協の構えは示したが、それぞれ党の総務会をクリアできず、妥協の道は閉ざされてしまった。

湯飲みに残っていた冷たくなった茶を一気に飲み干すと、宮沢は窓の外を見た。朝から降り続けている雨は、昼過ぎから一段と激し

クリントン米大統領が劣等感を感じたという噂も出た。ゴルフで「スリー・バット（バット）」などと英語を正確に言う癖があり、永田町では毛嫌いされた。

(3) 浜田卓二郎とハマコー

当時、国会にはふたりの有名な浜田議員がいた。ひとりはいわずと知れた千葉県・富津の暴れん坊、ハマコー。もうひとり、ハマタクこと浜田卓二郎。

こちらは東大法学部卒、大蔵省主計局育ちのスーパー・エリートだが、知名度では、衆議院選、都知事選に突如立候補して勇名を馳せたマキ子夫人が抜群。ふたりの浜田のうち、ハマコーは息子に議席を譲って引退し、ハマタクは、マキ子夫人とともに選挙で討ち死。九四年五月、新生党に鞍替えした。ハマコー著『日本をダメにした九人の政治家』はベストセラーとなる。政治家者がアルバイト代わりに政治家をヨイショするジャンク・

くなり、中庭の木々は大きく揺れている。皮肉なものだ、と宮沢は思った。中選挙区制のどこが悪いのか、と思っていた自分が、小選挙区制導入の旗振りをする。

おまけに強行採決だ。権力はなるべく行使しないのが政治だと思ってきたし(4)、いまもそう思う。しかし、そんなことばかりいってでもいられまい。野党も理不尽だ。一步も譲れないという姿勢では改革なんてできっこないじゃないか。ま、君子豹変す、か。君子なんて考えるのは自分らしくないな。

そう自問している間に、梶山の姿はなかった。

六月二十日午前二時

緊急動議を連発していた野党がついに「宮沢内閣不信任決議案」を提出した。内閣不信任決議案はあらゆる案件より先に議題となることが決められている。不信任決議案の焦点は羽田派の動向だった。幹事長代理の加藤紘一が国会議事堂二階の自民党幹事長室で、梶山ら幹部に票読みの説明をしていた。

「わが党は二七四議席。野党は社会一四一、公明四六、共産一六、

ブックと異なり、国会での現金の授受が活写され、立花隆をして「面白い」と唸らせた異色本だ。テレビのパラエティール番組でも「良いハマコー、悪いハマコー、普通のハマコー」のバラディで人気沸騰中。

(4) 宮沢発言録「権力はなるべく行使しないのが政治」というのは宮沢の口癖だ。無理に権力を行使するのが「霸道」であり、宮沢は常に「王道」を求めると言い続けてきたが、インテリの住まない永田町では理解されなかった。鴨長明「方丈記」の一節、「ゆく河の流れは絶えずしてしかもとの水にあらず」はよく宮沢が使う言葉。『方丈記』に流れる無常観こそ宮沢哲学の真髄だが、宮沢派議員でさえ、その意味するところを理解していなかったのである。

民社一三の計二一六です。問題は羽田派三五人のうちどれだけ、向こうへつくか、です。全部行つてしまつたらもちろん、不信任決議案は可決となります。無所属は七人。このうち阿部文男は出てこないですし、桜内議長は投票に加わりません。藤波孝生はこつちでしようが、民社から鞍替えした岩手の菅原喜重郎はおそらく、小沢一郎と行動をとにもするでしょう。わからないのは田川誠一さんです。河野洋平官房長官から、電話してもらうよう手配はしてますが」

「いくらオジとオイの関係だといつたつて、田川は向こうへつくだろう。無所属であてにできそうなのは藤波だけということだな。徳田虎雄はどつちかな」

総務会長の佐藤孝行がてらてら光る顔に笑みを浮かべていった。政調会長の三塚博が長く飛び出した耳毛を引つ張りながらいう。

「小沢ンともどもどうもばらばらだつていうじゃないか。小沢と羽田も相変わらず違ふみたいだし、渡部恒三だつて奥田敬和だつて重要閣僚までやつていて野党と一緒に不信任決議案に乗るなんてこと、ほんとうにできんのかね」

「さつぱし、わかんねえな」

と梶山。

梶山の茨城、佐藤の北海道、三塚の宮城、それに幹事長代理の加藤の山形ときては、言葉だけ聞けばまるで、東北のどっかの県議会みたいだな、と大蔵官僚出身でスマートさが売り物の副幹事長の浜田卓二郎は思った。

紀尾井町の羽田派事務所。

小沢一郎は腕組みした姿勢を崩そうともせず、議論に聞き入っていた。夜中だというのにどこで調達したのか、笹で巻いた鮪(5)が大量に運び込まれた。

「俺ンところは海のねえ選挙区だから、こういうモンはあんまり食いなねんだ」

張り詰めた緊張感を和らげようとしてか渡部恒三がおどけてみせた。が、凍りついたような雰囲気は変わらなかった。

沈黙していた羽田孜(つとむ)が口を開いた。

「みんなの考えはわかった。不信任決議案に乗るか、乗らないか、いろんな考えがあるということがよく、わかった。僕たちの決断は日本の歴史を大きく変えるかもしれない。自民党最大派閥を飛び出して、文字どおり政治改革の鬼となってきたわれわれの鼎(かみな)の軽重が

(5) 笹で巻いた鮪 東京・赤坂の老舗「有職(ゆうしやく)」の名物。海老や鯛などを鮪米と一緒にに笹でくるんだ高級品。一本四〇〇円(アワビだけ五〇〇円)。
自民党の田中派が昔から国会のヤマ場などで腹ごしらえ用に注文していた。

まさに問われようとしている。自分もいろいろ、いわれてきたが、改革に賭けるために外務大臣のポストを蹴った。一瞬たりとも外務大臣のポストに心が動かなかつたといったら、ウソになる。政治家たるもの日本外交の舵取りをやってみたいと思わないものはいないはずだ」

いつの間にか羽田が涙声になっているのに反対側に座った経済企画庁長官の船田元は気がついた。

「外務大臣を受けなかつたのは、羽田個人としての野心よりも、日本の政治を変えることのほうが何十倍、いや何百倍も大事だと思つたからだ。みんな、いろんな思いがあるだろう。立場もあるだろう。しかし、これは戦なんだから。生きるか、死ぬかの戦だ。坂本龍馬はなんといつたか。『いまは小さな漁火でもやがて日本の火の玉になる』行動するかについては、僕と小沢に一任してほしい」

「一任というのは個人個人の行動まで一任ということか」
だれかが聞いた。

「当たり前だろう。バカなことを聞くな」

張り詰めた空気がにわかに騒々しくなった。バカとは何だ、と反

論する声をきっかけにあちこちで口論が始まった。

「そういうことでいいね。小沢くん」

年長の羽田がこの集団の長はあくまでも自分だと強調するように、右隣りの小沢をクンづけして呼んだ。

「私はとくに異存ありません」

小沢はそれだけという間も腕組みを解かなかった。

「こんな道があったなんて話には聞いたことがあるけど、まさか自分が歩くとはね」

首相官邸の地下から道路を隔てた国会議事堂、議員会館へは地下のトンネル(6)でつながっている。議員会館や官邸近くの国会記者会館から国会議事堂に入るとき、この地下トンネルが日常的に利用されている。昼間は秘書や記者たちが頻繁に往来する。が、官邸からも通じていることは知られていない。

真夜中とあって通路は閉鎖されており、話し声と足音だけが、トンネルの壁にぶつかってこだまする。

「このトンネルは岸(信介)内閣の日米安保のとき、官邸や国会をデモ隊に囲まれて動けなくなったため、その教訓で造ったものです。

(6) 地下のトンネル 首相官邸の地中深くに張りめぐらされたトンネルに興味をお持ちの方には、格好の参考文献をお薦めしたい。『首相官邸のトンネル』(角川書店刊)。ノンフィクション・ノベルの旗手、西木正明が、政府のデイープ・スロートに取材してものしたサスペンスだ。
「二国の宰相ともなれば、常に危険に晒されている。首相官邸